

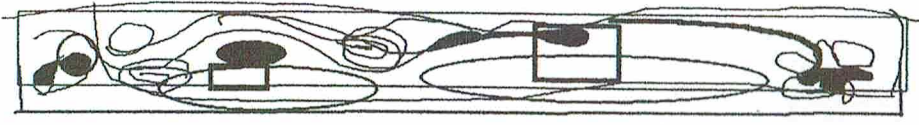
村野次郎創刊

# 香蘭



2018年(平成30年)8月号

第95卷 第8号 通卷1052号



## 香蘭

2018年(平成30年)8月号  
第95卷 第8号 通卷1052号

### 目次

村野次郎作品 私の愛誦歌(36)	今月の特選	近詠十五首「われの武庫川」	作品	推薦香蘭集	香蘭集	村野次郎への旅(101)	歌の生まれる場所(68)	エッセイ・自由研究 空き屋 廃屋	焦点(六月号)今を生きる歌	七首抄(六月号)	近詠十五首「暮しの点描」評(六月号)	作品一特選欄評(六月号)	作品一	作品二	作品三	香蘭集	緑地帯	明宝研究会第九十五回五月例会	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	他誌拜見	歌会及び会合・会員消息・他・編集後記・新宿日記	表紙絵	
山中光枝表二	加納・石井・西野・坪倉・伊藤(康)・大井田・飯島・宮口・水本	鈴木桂子	一	三	二	千々和久幸	千々和久幸	今村すま子	土井紘二郎	新井・金子・八木橋・竹本	大井田啓子	西沢みつぎ	今井紀一	青山侑市	柏原陽子	本田民子	坂井・松山・中村(美)	渡辺礼比子	満木好美	73・表三	和	田	雄
42	4	6	22	31	40	20	30	46	48	50	51	52	54	56	58	60	62	64	70	72			

山中光枝

# 蛇蛙われより清き備へして冬来る土に眠

りつらんか

村野先生には、残念ながら一度もお目にかかったことが御座居ませんでした。香蘭誌上では、髪はふさふさ、黒黒でダンディーなお写真の先生しか印象にありません。

作品からは、春夏秋冬を心優しい眼差しで詠んでいる、写生に徹した歌人のイメージを先入観として持っていました。

蛇蛙の歌を目にした時点でわたし自らが冬眠から覚まされたような感動と刺激を受けたことを思い出す。

後にこの一首を銅板に彫られたとの記事に触れた際、村野次郎の代表作の中の一詩であることに間違いないことを確信した。先生の大切にしている一首に感動している自らがこの上ない幸である。自然界に思いを馳せた分、かり易い作品なのに、なぜか迫力があり、光を放っている。一読してわが身から離れ難い愛誦歌となっている。

〔明宝〕372頁、『村野次郎三百首』66頁に所収

『明宝』

## 四 選 者 の 作 品

茶 番 平塚 千々和 久幸

役人が付度をして阿呆なこと言うをテレビがながなが映す

付度の指示や証拠を示せなど見当違いを言いて居直る

付度は己の出世と保身ゆえ フツの人の人なら誰でも分かる

付度をされる理由が分からぬと繕う鈍感な宰相と知れ

ゼニの授受なきを潔白と言ひ募るゼニより高きものをこそ惜しめ

問わるるは倫理観とう人間の品性にして法律以前

水掛け論になれば安倍サイドの勝ちなるに野党に攻める智慧、工夫なし

マスコミは腰が引け野党に決め手なく一強ドラマは茶番で終る

われにはわれの さいたま 西 沢 みつぎ

はじめなき四季となり果て折もをり卯月半ばが真夏日となる

他人は他人われにはわれの印象に平成最後の夏が来向かふ

そのままの炬燵の部屋に扇風機 矛盾気象の具体ぞこれは

下山せぬままの父と子ニュースより消えてだんだん春開けてゆく

何をさて措きても先づは確かめて無事なるあとの話題はあらず

認知症とは合点のゆかぬ病名と思ふわたしがそも認知症

捨つるほどの身にはさらさらあらねども宵々仏にマッチ擦るなり

権力を持たざりしわが生涯を幸せだつたと思ふこのごろ

あの頃は 鎌倉 香山 静子

ほんやりと人を思ひてゐる朝の空気を裂けるひよどりの声

ゆふべともなれば駅前のも一宿一飯の小鳥ら憩ふ

樺太樹に群がりゐたる小鳥らが光の粒となりて散りゆく

人生は様々などと嘯けどやはり気になるあの事だけは

名声など何程のことかたばみは木下に淡き黄の色を敷く

面識のなき人より送り来し歌集と言へどずしりと重し

十分に生きたと呟く女の背をしづかに包む今日の夕陽は

あの頃は楽しかつたと言つたとて「あの頃」を知る人もうゐない

果てしもあらず 東京 桜井 京子

葱を植ゑいんげんの種をまくといふメールの向かうの半島は春

わたくしはいつもあなたの味方だと言つてもくれず椿が咲いて

樹の下に落ちて椿のはなやぐを知らずたるあたりあの頃のわれ

たたかひは果てしもあらず春昼を眠くてならぬわれとパソコン

わたしいま五十肩なのはなやぎて恭子さん言へりさくら吹雪く日

二浪して東大に入つた佐川氏の経歴なんぞは知らずともよく

旧き良き時代ありしよ小指を立てこれで次官を辞めたと言へり

「水戸黄門」見ては溜飲をさげてゐる世の片隅のわが家の夕餉

# 今月の特選



多治見 加納 喜美

泣き笑い  
存<sup>なご</sup>らえる自責深めてまた一人弟を隠す臆月さみどり  
たまきはる絵筆に生きて焼け遺るスケッチブックの金具の憐れ  
母として慕いくれたる弟に着るはずもない喪服の泪  
祝婚と葬儀の禍福<sup>わざな</sup>糾いぬ生さるわたくし泣き笑いして  
何ごとぞ弟三人先立ち<sup>あき</sup>て蓮華草咲く故里で呼ぶ

老介護解き放たれた友人が旅に行こうとしきりに誘う

ささやかな抵抗としてチャンネルを変える日本の幾つかの貌

死んだ魚 習志野 石井 雅子

ここにゐるほかにはなくて点滴の落ちる雫を見守るばかり  
一番に好きだったことあきらめて ときどき死んだ魚の目をして  
婚姻は契約であるつくづく一人が病めば背負ふほかなし

連休前後 東京 伊藤 康子

店頭に半額シールを貼られたるゴーヤの苗がつる伸ばしゆく  
茶の間よりいい音だなあと父の声明日の三合の米ときおれは  
満腹の子がもう寝息をたてている ひと息ごと<sup>ごと</sup>に幼にかえる  
見てるのはドアの近くのキミでなくトレインビジョンの明日の天気  
ゴールデンウィーク中に働いて連休明けに連休をとる

顔見知り<sup>顔見知り</sup>が居てよかつたと二人目を産みたる女性社員の戻る  
おばさんはそう簡単に辞めません三人目でもきつと居るから

大観 展 川崎 大井田 啓子

公園となりたる「江戸城北の丸」今に苔むす石垣残し  
濠に浮く無数の若葉眺めおり夫が信号見つめゐる間を  
水面に浮かぶ青葉が光りをりどの一枚から沈むのだらう  
連休の暇つぶしとてはるばると横山大観展を見に来つ  
大観の描ける富士にいや高く太陽のあり いや日の丸か  
大観の「屈原」を見る人のやま後ろ頭は真剣そうで  
薄暗き館内に人ひしめけりかのガス室もかくやとぞ見る

このころ 川崎 飯島 智恵子

キャベツ畑でありし丘の上畑知らぬまに四階建のケア・ホーム建つ  
入る当てなければと徒歩で行ける距離内覧会の誘いにのりぬ  
内覧会の案内に巡るケア・ホーム二階の窓からわが家が見える

卓上のうすむらさきのフリージア春荒寥のころに香る  
シリア攻撃開始したるトランプは世界平和を簡単に言ふ  
君以外君を理解する人はなく素数のやうな孤独と思ふ  
ネガティブな私をけふは裏返すりパーシブルのコートと共に  
みどりの日 東京 西野 美智代

とむらひの菱田家を指す路標<sup>みちしるべ</sup> 大観かけば作品となる  
五月四日はみどりの日にてその名もつわが妹がグリーン車に乗る  
遺されし袖の単衣<sup>ひとへ</sup>に身をつつみ命日にゆく初夏の菩提寺  
中庭にアンネゆかりの薔薇咲き中学生の声が行き交ふ  
赤芽鶏の垣のみどりが描ふころ新入生の制服なじむ  
職を退き住吉踊りに深淵とかつばれかつばれ白足袋跳ねる  
陽一郎、一石<sup>いせ</sup>と名付けし親心 偉大な物理学者にならん

ああ知らなんだ ふじみ野 坪倉 寛  
尊徳翁の壹圓札が出で来しがべらべらにしてほろほろである  
「ポケットにや今日も小さなお札だけ」宮城まり子は健在のよし  
八重洲口にて靴を磨かせ夜行にて帰省をしたる青き頃あり  
外食券食堂での昼飯<sup>ひるめし</sup>は四十円 靴磨き代は覚えてゐない  
外来語と思ひをりしが「バネ」なるは歴としたる日本語でした  
発条と書きてばねともぜんまいとも読むのださうなああ知らなんだ  
聖路加<sup>せいりか</sup>と思ひをりしが聖路加が正しいさうなああ知らなんだ

危うくも難をのがれし息子の名前かたりてきたるオレオレ詐欺に  
とぎれとぎれの声の近づきへリコプターが「詐欺に注意」とこれは本物  
夫のいぬ今が青春葬儀にて悲嘆にくれたは何処のどなたよ  
巻尺をのびしビュルンと放ちやる何もなかった一日<sup>ひとひ</sup>の終り  
とびきり辛い 東京 宮口 弘美

花みずき街道沿いを彩りてピンク白ピンク白ピンク白  
連休はフランスに新婚旅行とな息子夫婦の「甘い生活」  
惚けても未だにここがわが城とわれを押しつけ母のキツチン  
同僚への怒りおさまらぬ本日はとびきり辛いカレーを作ろう  
筍もみじん切りにして味噌汁に父母<sup>ふぼ</sup>の入れ歯にシヤキシヤキは敵  
ケータイをやめて下さいと言われていて優先席はアンタツチャブル  
あの頃の衝撃が少し懐しき有吉佐和子の「恍惚の人」

種子まだ青く 倉敷 水本 美恵子  
東京のみやげを持ちて帰ってくる孫がその度きれいになりて  
瀬戸内温泉に一日あそびしつれあひが老人会に疲れ帰り来  
足腰のたしかなる夫は階段をわれはエレベーターに乗る駅舎にて  
話など聞かねばよかつた庭先の勿忘草の種子まだ青く  
つばめ来て車庫のシャッターの開閉は鳥の時間に合はせられをり  
何もかも頼られてゐる昼くればペペロンチーノのんにく刻む  
パン・リンゴ・インスタントラーメンを買ひ置きて行かねばならぬ全国大会

パン・リンゴ・インスタントラーメンを買ひ置きて行かねばならぬ全国大会

### 鈴木 桂子

## われの武庫川

なだらかにめぐる六甲山地窓に見て阪神生活五年目に入る  
 十六夜の月照る夜を窓の外にテレビの中の東京は雪（春の雪）  
 静まれるわがビルの上を春の夜大嘘鳥の啼きてわたれる  
 同胞をゲームのやうに消してゆく若き元首の世に在る不思議  
 窓もりてわが床にさす月光に久しく逢はぬ兄おもひ出づ  
 春の夜の卓にさびしき飯をとるわれに兄あることのしあはせ  
 あたたかな雨にぬれつつ武庫川の柳青める岸边をあゆむ  
 さみどりの樹々の下ゆく通学の少年少女 全身が風  
 予告なくわれに届きし若き死よ机の上に置く遺歌集ふたつ  
 幼子を残して逝くをかなしめる言葉はげしく歌集にのこる  
 歌集には傷つきやすき少年がもえる木のやうに立ちてゐるなり

### 近詠十五首

## ひと言随想 武庫川

うつくしいやさしい心にゆらぎつつ歌詠むきみにつらいこの世だ  
 ひとつもとの木にあかき花咲くところ空ひつそりとしづまりにけり  
 いまそこを過ぎゆくきみとあなたへの手向けとなさむ矢車の花  
 川岸のみどりを映し六月はくらぐら流るわれの武庫川

五年前に何の縁もゆかりもない、ここ阪神に移り住んだ。高校卒業以来、私には十五回目の引越である。もともと転勤族であったから、北海道、青森、山形、神奈川、東京、栃木、埼玉、和歌山、山口…と、よくも悪くも居住地を変えることには慣れていた。まして今はひとり身である。いざという時の備えさえできていれば、世俗のしがらみから解放されて、それなり自由に楽しく生きられる、

とも言える。かくて、偶然やってきたこの地で、私は武庫川と出会うことになった。海も山も、輝かしい歴史もさすが西都である。しかし、この一本の流れほど強く私を動かしたものはない。遠く六甲の山なみをのぞみ、かつて「渡し」の人足が、その流れを渡したという、わが街の、この場所からの、武庫川の流れはあまりに美しかったのである。

村野次郎への旅 (101)

わが青春の村野次郎 (101)

千々和 久幸

6月11日、台風5号が関東に最接近。毎度、異常気象などという発表が空疎に響く。さて1965 (昭和40) 年6月号の先生の巻頭の八首は、「時の足音」である。

① 静まりてみどりくろすみゆく野原花のパレードひと通り終る

(一いろにみどり静まりゆく野原花のパレードひと通り終る)

② いくすぢか鏡に髪を白く置き遠くすぎゆく時の足音

(いくすぢか鏡に髪を白く置き遠くすぎゆく時の足音)

③ 世の波のきびしき中に老づくつと便りこまごまし北国の友

(世の波のきびしき中に老いづくつと便りして来ぬ北国の友)

④ 硝子戸の外に來りし若き声追憶にしてはなやぐ今も

⑤ おしうつり時の流れのなごりにか雨後の笹群きらめきつづく

⑥ 結論を得て立ちあがり篠竹にすがしく雨の降りあるを見つ

⑦ とどまらぬ時の流れにまだしぶき哀歎消えぬこの備忘録

⑧ 猛り来る暴風雨に叫ぶ時ありき草に沈みてひそかなる石

5月号の心理詠に続き6月号も、いつもの時事詠や身辺詠から離れた観念的な一連である。これまでの作品には作者の生活の影が差し、それが読者に興味と親しみを与えていたが、今月もそんな従来の詠い口とは少しく違った素材と角度から詠われている。

①の歌、タイトルにことよせて言えば、ひと時目を楽しませてくれた春の花野が、次の季と入れ替わる時の間を捉えたもので、その

②の歌、同じ「時の足音」でも、ここでは己の身の上を過ぎて行く「足音」である。それを鏡と髪を通して詠うのは、古来よりお馴染みの手法でもある。

先生もこの手法で軽く、また平易に詠われている。老いの自覚は髪から来るが、その髪を媒介にして、自己の身に降り積った時間を観念的に捉えている。

初出と歌集とは、ここでも歌集の方が整っていると言えよう。

③の歌、今度は一転して、老いを深めて行く「時の足音」を友を経由して詠んだ。しか

し、さほどに深刻でも、また哀切と言うほどでもない。

それは「世の波のきびし」も「老いづく」「便り」も、概念的な把握に終っているからである。つまり事柄はよく理解出来ても、それが実感に届かないもどかしさが残る。

先生に対してまことに僭越な物言いをすれば、言葉が作者の肉体を潜って出て来ていない、ということになる。評論家(?)とは、この程度に無責任である。

④の歌、硝子戸の外から聞こえてくる若い声に、自らの若い頃の声が重なり、微笑笑を禁じ得なかった、というものである。

追憶の中であつても、その声ははつきりと耳に残っていたのだろう。話題そのものは忘れても、華やいだ声だけは覚えていて。そんなことがきつとあつたのだろう。

⑤の歌、初句の「おしうつる」は「押し移る」で、意味は「時勢・年月・感情などが移り変わって行く。推移する」(「広辞苑」)である。

だが、そんな時の流れに取り残された笹群だけが、ひとり輝いている。あそこだけは時間止まっている、という思いだろう。

⑥の歌、「時の足音」とは内容的に直接的な関係はないようだが、⑤の歌の「笹群」を別の角度から詠み直したものと思われる。

満足のいく結論を得た余韻が、「篠竹」に降る雨に曳航していると読んだ。満足感に浸っている場合には、真つ先に目に触れるものにも思いが行くから、ここは「篠竹」でも櫻でも躑躅でもよかつた。いま、周辺がみな自分に好意的に見えるに違いない。

⑦の歌、一首の主意は、備忘録に事実の記録を残したが、そこには過ぎていく時に付着している哀歎の感情もまだ消えずに残っている、というのだろうか。

三句の「しぶき」の原義は、広辞苑によれば「し吹く」で、その第一義は「雨風がしきりに強く吹く。雨がはげしく吹きつける」である。ここでは、備忘録にまだ生々しく留まっている記憶、の比喩化であろう。

「時の流れ」を現在から過去へ整然と一直線に流れるものとは捉えないで、時に付着した思いが行きつ戻りつする状態を、こう詠まれたものではあるまいか。

⑧の歌、二句の「暴風雨」は、⑦の「し吹く」が導き出したものか。この一首も一連の

「足音」を聞いている、というのだろうか。その情景が一、二句の描写に具体化されている。芽が出、花が咲き、そして萎んで黒ずんでゆく過程がそのまま辿られている。この情景の推移を観念的に言い直したフレーズが下句、という構造になっている。

それだけに下句は洒落た表現になっているが、決まり過ぎという感じもしなくはない。

「香蘭」初出の上句は歌集で改められ、滑りがよくなっている。だが下句が決まっているだけに、泥の匂いのする初出の二、三句は残して欲しかった。

②の歌、同じ「時の足音」でも、ここでは己の身の上を過ぎて行く「足音」である。それを鏡と髪を通して詠うのは、古来よりお馴染みの手法でもある。

先生もこの手法で軽く、また平易に詠われている。老いの自覚は髪から来るが、その髪を媒介にして、自己の身に降り積った時間を観念的に捉えている。

初出と歌集とは、ここでも歌集の方が整っていると言えよう。

③の歌、今度は一転して、老いを深めて行く「時の足音」を友を経由して詠んだ。しか

「時の足音」と関連させて読めば、ある種の寓意が感じ取れる。

平生は草に沈んで沈黙している石も、猛り来る暴風雨には叫び出す時がある、というのである。つまり身に迫った非常事態には、平生は泰然自若として寡黙な石も、立ち上がって叫ぶというのである。

むしろ、字義通りにリアリズムの歌とも読めるが、ここではリアリズムの歌に作者の影が差している歌、と読んでおこう。不思議な歌である。

青春とは何だろう。この言葉の持つ眩しさの正体は、いったい何に由来するものか。人並みに未知なるもの、見果てぬものに対する漠然とした憧れはあつたが、わたしの青春は概ね退屈な時間だった。

それが青春の実像だということは、観念的にはよく解つていた。だが確証を掴めないまま、青春という季節の周辺を藻掻きながら、ただ空転していたような気がする。

青春とは何かという問いそのものが、徒勞であることを実感しながら、青春は足早に過ぎ去つて行った。